

女子青年の発達と教養教育

短大保育科一年生における「教養演習」の取り組みを中心に



亀谷 和史

日本福祉大学・女子短期大学部

はじめに

私は、愛知県の知多半島に位置する女子短期大学保育科に勤務しています。今年でちょうど丸六年が過ぎました。振り返ればこの六年間、同僚の先輩の諸先生方から様々な助言や支援をしてをいただきながら、あつという間に過ぎ去った六年間のようなではありません。

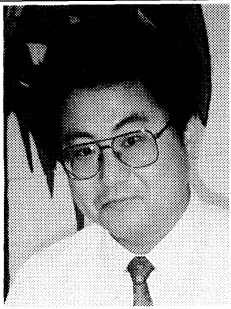
私の勤務している短大は一学年約二百二十名、六〇％位の学生が下宿生・寮生です。学生は東海近県だけでなく、主として静岡以西が多いものの全国から来ています。また

四年制の社会福祉学部と併設しており、そのおかげで多くの学生が入学当初から、保育や福祉の問題に関心をもっています。ここ数年は、実習指導の充実などカリキュラム改革の成果もあってか、七〇％以上の学生が毎年、保育・幼児教育方面に就職していきました。また、約一割の学生が社会福祉学部編入していきます。

周知のように、短大の保育科は、保母資格と幼稚園教諭第二種免許状が同時に取得できますが、二年間に保育所実習、幼稚園実習、施設実習という三回の実習に行かなければなりません。多くの資格必修科目があり、過密カリキュ

ラムにならざるをえないのですが、少しでも人間や社会の問題に視野を広げ、集団で討論し考える力を促すことをねらいとして、勤務校では、二年間を通して演習（ゼミ）が必修としてカリキュラムの一環に位置づけられています。一年次は「教養演習」、二年次は「保育基礎研究」という演習（ゼミ）が設けられています。

私は、教育学の専攻で、勤務校ではこれまで、保育・幼児教育に関する講義・ゼミを中心に担当してきました。この私立大学でもそうでしょうが、私の勤務校もご多分にみれず非常に多忙で、年間五コマがノルマですが、この数年間、専門科目は通年の講義が二種類、半期のものが三種類、そして右記の一年生、二年生のゼミを二つ、さらに実



かめたに・かずふみ●一九五八年大阪府生まれ●専攻は、教育学（発達教育学・乳幼児教育）。主な研究課題としては、H・ワロンの発達理論、発達・教育思想研究●担当科目は、保育論、教育原理、実習内容論など●論文・著書に「H・ワロンの発達理論の全体的特徴と「精神発生学」の構想」（日本福祉大学研究紀要）第九十号、一九九四年）、「年齢別保育実践・幼稚園編・五歳児」（共著、労働旬報社、一九九三年）、「発達心理学」（共著、学術図書、一九九一年）など。

習の事前事後指導を担当する保育所実習担当と、ここ数年ノルマオーバーでずっとやってきました。短大保育科としての「実習教育」については、以前に共同で学会でも発表し、報告としてまとめましたので、ここでは、この二年間の、とりわけ九四年度の教養演習での取り組みを中心に述べていきたいと思います。

新年度スタートの最初の取り組み

写真撮影と

自己紹介パンフレットの

作成

ゼミといっても一学年約二百二十名を六つに分けたクラスで、一クラス三十六、七人の集団です。この人数でいわゆるゼミを運営していくわけですから、大変といえば大変です。

どのクラス（ゼミ）でも第一回目は自己紹介をすることが多いでしょうが、私の教養演習の第一回目は、最近はいつも自己紹介とあわせて、いろいろ学生に質問しながら、二〜三人ずつ、あるいはグループで写真をとるようにしています。自己紹介で一人ずつビデオを撮った年もあります。これには二つのねらいがあって、第一に全国各地から集まった見知らぬ者どうし、しかも名簿順に全く機械的に同じ

クラス（ゼミ）のメンバーになったわけですから、新入当初の緊張をできるだけときほぐし、クラス（ゼミ）集団にうちとけられるようにすること、第二に私自身ができるだけ早く三十数名のゼミ学生の名前を覚えるためです。

そして、B5・一枚の用紙に住所録を兼ねて、自己アピールを含めて自己紹介のプロフィールを書いてもらい、次の週の大学生活への導入として位置づいている新歓オリエンテーション合宿に合うように、学生といっしょにパンフレットにしてみました。

新歓オリエン

勤務校の短大では、毎年四月の中旬に大学教育への導入として新入生歓迎オリエンテーション合宿をおこなっています。

テーション合宿

この新歓オリ合宿では、ここ三〜四年は、大学での学習の動機づけとクラス交流をねらいとして、大学とは隔たつてホテルで一泊二日でやってきました。

随分前には、キャンプをやっていたそうですし、私が赴任した当時は、「春季セミナー」といって、五月の中旬にゼミ単位ごとに、大学近辺が夏は海水浴場になるので、この民宿で二泊しておこなっていました。各ゼミ同時に実施していましたが、内容などは全てゼミの独自に委ねられ

て、入学間もない学生が自分たちで企画して、バーベキューやファイヤーなどで交流を深めていました。四年前から今のやり方に変えたのですが、その理由は、一言でいえば、それまでの学校生活での受動的な学習と行動様式の影響もあつてか、今の学生の活動内容や集団としての運営の力が、私たち教員の期待するものにはなり得ず、大学生として、また青年期にふさわしい学習への動機づけにはなっていなかった、ということにあつたと思われまます。⁽²⁾

そこで四年前からは、短大生活の目標づくりとクラス交流を前面に掲げ一泊二日でおこなっています。そして、まず保育科の学生として関心のもてる内容、たとえば子育てや女性の生き方、性の問題をテーマに大学教育への導入として、専門の方に依頼し講演を行なうようにしました。たとえば、一昨年は、日本でフリーのジャーナリスト・記者として十数年間活躍されているフランス人のコリーヌ・ブレさんをお呼びして、自身の出産・子育ての体験について話していただきました。また昨年は、性科学（セクソロジー）研究者として著名な村瀬幸浩氏に来ていただいて、「性と愛への入門」というテーマで講演していただきました。

あわせて、保育を学ぶことへつながるレクリエーション

(歌ったり集団での遊び)をこれも外部から専門の方に協力していただき、心も体ものびやかにしていく、といった内容でおこなってきました。以前に比べて、ゆるやかなかたちで、保育を学ぶことを意識化できるように工夫してきたのです。そして、夜はゼミごとで交流会ももちます。こうして、クラス(ゼミ)のメンバーとともに語り合うことで友達関係を築かせ、ゆるやかにクラスとしてのまとまりを形成していくこともねらいとしてきました。

さらに私の場合は、後述するように、この二、三年、オリ合宿で聞いた講演を、ゼミの学習テーマを選ぶ導入としても位置づけてきました。

ゼミ指導上の基本的視点・方針

さて、新歓オリ合宿で、このような大学生活にむけての第一歩を始めた後、四月下旬に、六つの班(各班六名)を編成し、いろいろと係を決め、そしてクラス全体で共通のテキストを選ばせることからゼミを始めていきます。

私の取り組んできた教養演習は、とりたてて何か特別にかわったことをやってきたわけではなく、基本的には、ゼミの学習方法を伝え、選ばせたテキストに依拠しながら進めてきました。学生への履修ガイドにも載っているように、

「本を正しく読み取る力、読んだものをまとめる力、討論することのできる力、および自主的集団的学習の基礎を身につける」ことを通して、「現代の社会と人間についての認識を深める」ことをオーソドックスに追求してきたつもりです。

ただ振り返ってみると、この二年間、指導上いくつかの基本的な視点・方針をもって取り組んできたので、その点について述べたいと思います。

パブリックな討論を

どうひきだすか

まず一クラス三十七名ですから、いきなりクラス全体で学生たちには、これまでの経験からほとんど不可能でした。彼女たちの多くは、これまでの学校教育で「学校知」ないしは「受験知識」をほとんど一方的に詰め込まされ、受動的に授業を受けてきたせいとか、パブリックなレベルでの討論を行なってきた経験がほとんどありません。私が何か問題提起をしたり意見を述べて「挑発」しても、ほとんどといっていいくらい全体での討論へと発展してはいきませんでした。これまでの中学・高校と同じ「授業」として、つまり先生からの「お話」と同様に受けとめられてしまうのです。

しかし、授業の合間など(講義中もそうですが)の数人

での私的なおしゃべりになると、花をさかせます。なんでこんなによくしゃべるのかと思うくらい、生き生きとしやべり続けます。気の合った者どうしであれば、私的なレベルではあれ、大いに「対話」|| コミュニケーションの力を発揮するのです。

パブリックな場でのディスカッションの不在と際限のない私的なおしゃべり||、このギャップこそ、今日の日本の教育状況・社会的状況が生み出してきた若者の行動スタイル(=「習慣的行動」^⑧)なのでしょうが、ここにいかにか切りこんでいくか、彼女たちの私的な「対話」|| コミュニケーションの力をどうパブリックなレベルにまでもつていくか、ということにゼミ指導の第一の課題があったように思います。

関心ある学習テーマの提示

——自己を対象化していく——

第二に、試行錯誤しながら何年かの経験を経た分かってきたことは、彼女たちの興味・関心のもてるテーマや学習内容をいかに提起し、つくっていかうことの大切さです。青年期における彼女たちの最大の関心は、当然のことながら、恋愛であり、性の問題であり、女性としての生き方の問題などです。これらは、実際、密接に結びついているテーマで

もあり、エリクソンの自我同一性論を持ち出すまでもなく、彼女たちにとって人生の当面の大きな関心事です。おそらく男子学生以上にいろいろと思いつめさせている、青年期の「自分づくり」としての中心的課題だといえるでしょう。にもかかわらず、実際には、知らないことや自分自身の思い込みがまだまだ多いのです。

そこで、いきなり一般的なレベルで社会の問題を対象化する内容から取り組んでいくのではなく、自分を対象化する作業(=「自分づくり」)からはいつていき、認識を共有化していくこと、あるいは、彼女たちの学びたいテーマを取り上げて、関連するテキストを自分たちで選べることで、共同で本を読んでいく力、学ぶ力を十分に発揮してくれるのではないかと、考えるようになってきました。

また、「自分づくり」の課題とあわせて、社会福祉学部と併設している本学の短大生は、入学当初から福祉や障害児(者)問題などの関心がたいへん高いことも指摘できます。これは、おそらく全国的にもめずらしい本学短大の特色で、「福祉も学べる短大保育科、また編入もできる」というイメージで入学してくる、目的意識の高い学生が多くいます。学生の学ぶ要求を受けとめ、そこに焦点をあてたテーマを取り上げることも大切だ、と考えるようになり

ました。

学生は

学ぶ力・エネルギーを

潜在的にもつ

さらに、今述べたこととも重なりますが、二年位前から特に自覚するようになってきた学生の見方として、「今どきの学生は

学力が低い、論理的抽象的な思考力に欠けている、討論もできない、私語（おしゃべり）が多い」といったように、学生の否定面にばかり目を向けるのではなく、そもそも彼女たちは学ぶ要求をもっているのであり、関心ある学習内容にそつてゼミを進めれば、学ぼうとする力を十二分に發揮してくれるのではないかと考えるようになったことでした。このことは、実習での指導においてもそうでしたが、最初に学生を否定的にとらえて、それをどう「補償」していけばよいか、という観点から出発するのではなく、学生の持つているポジティブな面に働きかけていくことでこそ、そのような否定的な面自体も克服していけるのではないかと発想を逆転させて学生に向かうようになっていったことです。

このように考える以前は、短大生は忙しいので、あまり課題をだすことなく、どちらかという私の方でもかなりいろいろと資料等を準備し、それらを紹介しながらゼミを進

めてきました。しかしこれでは、高校までの「授業」とさして変わらず、自主的・主体的に学んでいくという本来のゼミ学習にはなり得ていないので、これでもいいのだろうかと思ふようになりました。そして学生の興味・関心のあるテーマであれば、もつと学生を信頼して、学生にいろいろと自主的に委ねてもいいのではないかと、私自身は「背後」に退いて、彼女たちどうしで「対話」し「考え合う」時間をセツティングすることが必要ではないかと、考えるようになってきました。

実際、後述するように、学生たちは予想以上にすごい力を發揮してくれました。

マンガ・ビデオ・映画の利用——「感動」を演出する——

そして第四に、人生の最も多感な時期を生きているヴィジュアル世代の彼女たちに、身近なテーマや話題に関わつた感動を呼び起こすマンガ・ビデオや映画をゼミの一環として取り入れ、それをめぐつてみんなで考えさせるようにしてきたことです。

マンガについては、いろいろと議論のあるところでしようが、私は、機会あるごとに、子育てや女性問題、障害児問題をテーマとしたものを学生に紹介したり、ゼミでも取

り上げてきました。(4)

ビデオ・映画に関しては、幸いなことに勤務校の図書館には、A Vホールという約八十人収容の「映画館」があつて、予約申し込みをすればゼミの時間を少し延長することになります。いつでも大きなスクリーンでビデオや映画を見ることが出来ます。

そこで、いつもテレビの教養番組のなかで、ゼミのテーマに関わる番組で学生に見せたいと思うものを忘れずに録画するように、この数年間ここがけてきました。

ゼミのテーマに関連するもので、心の片隅にであつても感動として一生記憶にのこるビデオ・名画をみせる「感動仕掛人」として、ゼミを演出し、少しでも自分自身の生き方や今日の社会のリアルな問題に関心をもつきっかけにしてみられれば、とやってみました。

一年間のゼミの学習内容と運営上の工夫

テキストの選択と

一年間ゼミで

取り組んだ内容

八冊持っていく、その中から学生に選ばせることにしまし

以上のような四つの基本的な指導上の視点・方針をもって、新歓オリ合宿が終わった四月下旬のころに、まず学生が関心を示しそうな本を七く

た。昨年度は以下のような本を学生に提示しました。

- ① 『ぼくらのSEX』（橋本治著・集英社）
 - ② 『恋人とつくる時間（とき）』（村瀬幸浩著・KKロングセラーズ）
 - ③ 『さわやか性教育』（村瀬幸浩著・新日本出版社）
 - ④ 『赤ちゃん・ザ・革命人』（コリーヌ・ブレ著・世界文化社）
 - ⑤ 『女と男―男も考える性差別の現在―』（熊田亘・ほるぷ出版）
 - ⑥ 『生命かがやく日のために』（斎藤茂男著・共同通信社）
 - ⑦ 『幸せなのになぜ涙がでるの』（アグネス・チャン著・労働旬報社）
 - ⑧ 『豊かさとは何か』（暉峻淑子著・岩波新書）
- 一昨年度もほぼ同様のものを紹介しました。
- 一、二を除いてすべて、学生にとって、どれも関心あるテーマで読みたくなるような本をあらかじめ用意したわけなのですが、実は、すでにここには「作為」があつて、私としては、前期は愛と性の問題・女性の生き方について、後期は障害児福祉の問題か、現代日本に支配的な「能力主義」の価値観を問いかけるテーマをと、おおまかには考え

て以上のような本を用意していったわけです。

学生たちは、新歓オリ合宿で村瀬さんの講演を聞いていることもあって、班で話し合わせると、性の問題に関する本を中心に何冊か「これを読みたい」と言い出します。しかし、なかなか一冊にはまとまりません。そのうち、「福祉の大学に来たのだから、障害児福祉などのテーマもゼミで取り上げてほしい」といった意見も出てきました。そこで、私の方から、「一年間あることだし、前期と後期、それに夏休みの課題図書として、三冊読もう」と提案すると、新入当初で学生もはりきっていますから、「じゃあ、そうしよう」ということになって、昨年度は、前期に①『ぼくらのSEX』、夏休みの課題図書として②『恋人とつくる時間(とき)』、③『さわやか性教育』、⑦『幸せなのになぜ涙がでるの』の三冊のなかから一冊、そして後期に⑥『生命かがやく日のために』を学生たちは選びました。(一昨年もほぼ同様に、前期に②、夏休みの課題図書として⑦、後期に⑥を学生たちは選びました。)

当初、私としては①や②をゼミのテキストとして取り上げることは、正直なところなんとなくためらいもあったのですが、学生たちの読みたいという「熱意」に押されて取り上げたのが本当のところです。

①『ぼくらのSEX』は、雑誌『教育』にも書評欄で紹介されていたが⁴⁾、あの「春つて曙よ！」で始まる名訳で有名な『桃尻語訳 枕草子』の著者、橋本治氏が若者向けに書き下ろした「性教育の本」です。SEXの具体的な行為から、男らしさ・女らしさ、恋愛と友情、マザコン・ファザコン、エイズや同性愛まで、恋愛と性のあらゆるとっていい話題について、筆者の見解が展開されていて、各章の見出しの「卑猥っぽい」印象とは異なり、正攻法で論理的に若者に語りかけるように書かれたまじめな本です。「SEXとは他人との関係をつくっていくことだ」という基本的な考えが一貫して説かれている、三十九章・三百八十ページにも及ぶ読み応えのある一冊です。

また、⑥『生命かがやく日のために』は、ダウン症に先天性食道閉鎖症を伴って生まれてきたわが子の養育を拒否している両親をめぐって、なんとか救いたいと筆者はあえて新聞を通して読者に問題提起し、寄せられた様々な投書・意見や取材しながらを紹介しつつ、現代日本になお根強く存在する能力主義イデオロギー、弱者排除の優性思想に疑問をなげかけた、これまた読み応えのある一冊です。たいへん重いテーマの本ですが、学生たちにとって「もし、将来生まれてくる子が障害をもっていたら……」障害児

(者)と共に生きるとはどういうことか：」と思わず考えこんでしまう一冊です。

前期・後期にこの二冊、夏休みの課題図書一冊を含めて三冊をじっくり読みこなすのは、忙しい短大生にとつて、けっこう大変かもしれないと思いましたが。しかし関心のもてるテーマの本を学生時代にできるだけ多く読んでほしいという願いもあって、この二年間、三冊を読みこなしてきました。

さらに、五月の連休で二回、ゼミが休講になるので、一昨年・昨年と、マンガ『ビッグ・コミック』に連載されていた聴覚障害児の子育て・療育とその家族の成長を感動的に描いた『どんぐりの家』（小学館）を取り上げ、連休あけにミニ・レポートを出してもらうようにしました。これは、後期のテーマへの導入という位置づけとして取り上げてきました。

また、報告と討論に加えて、年に何度か学習テーマに関連するビデオ・映画を間にはさんで見ないようにしました。

昨年度は、前期二回・後期三回見ました。（前期は、NHK平成世の中研究所「子どもはどこまでセックスを知っているか」（一九九三年五月放映）を二回に分けて。後期は、映画『愛は静けさの中に』・NHKスペシャル「大江健三

郎の世界——父と息子光の響き合い」（一九九四年十月放映）・映画『レナードの朝』

それに、ゼミのテーマに関連するその時々新聞記事や雑誌の評論等の切り抜きを随時紹介したりもしました。

さらに、昨年度、私のFクラスには、本学短大で初めて台湾からの留学生Rさんがメンバーにいたので、毎週、時間がゆるすかぎり、「Rさんの楽々中国語講座」と称して彼女に中国語の童謡を、あらかじめ歌詞と意味をかいてくれたものを用意してもらい、ゼミの始めにみんな教えてもらって歌いました。（資料1）一年間終わってみれば、あいさつと数、そして六つの童謡をみんな楽しんで学んだことになりました。学生からは「私達のゼミは楽しく中国語も勉強しているんだ」と予想以上にたいへん好評でした。以上の昨年度の年間の取り組み・学習内容を一覽表にまとめたものが、表1です。ほぼ予定どおり進めてきました。が、後期の十月十四日は、大江健三郎氏がノーベル文学賞を受賞した翌日で、その日の朝刊各紙に一面トップで報道されたので、急遽、学習内容を変更して、その記事を紹介するとともに、数日前に放映されたNHKスペシャル『大江健三郎の世界——響き合う父と子』を学生に観てもらったことにしました。

台湾の中国語講座

2012年

台湾の中国語講座

2012年

歌

★ 星星 (ぼし) ★

一 閃 一 閃 亮 亮 明 明
(ちろちろ 光る)

滿 天 都 是 的 小 星 星
(赤星 ↓ 星々)

掛 在 天 上 的 小 星 星
(星にかけられて ちろちろ輝いて)

好 像 歌 的 小 眼 睛
(まるごとく天上の星のようだよ)

一 閃 一 閃 亮 亮 明 明
(ちろちろ 光る)

滿 天 都 是 的 小 星 星
(赤星 ↓ 星々)

歌

小兔子舞

小白兔 能跳舞
(ぶさばさ)

月亮下 的 舞 舞
(月の光の下でダンスをやる)

时 候 不 方 回
(時の流れも、戻らない)

大 苦 難 快 ！ 快 ！ 快 ！
(大変な苦難！快！快！快！)

(赤い、赤い、赤い)
啞 啞 啞 啞 啞 啞



ゼミの進め方と

工夫

私は、毎回、B4一枚の用紙に、「第○回教養ゼミ」と題して、今日のゼミのスケジュールや取り組む内容、そして次回の予定を書いたもの（鏡）を必ず学生に配るようになっています。そのねらいは、第一に、連絡事項を含め、いろいろと学生に伝えたいことが毎回ありますが、これを書かずにいると多忙ゆえ、ついうっかり忘れてしまうからであり、第二に、たいていゼミの始まる時間はおしゃべりが咲いているので、ゼミの最初にあらかじめ今日の内容を提示することで、学生に集中力を喚起すること。また第三に、何をやったのか記録として残すということも意図しています。さらに第四に、しばしば新聞記事や私の意見や今考えていることも書き加え、三十七人の学生たちとのコミュニケーションを少しでも促進することもねらいとしています。

そして、この二年間はだいたい次のように一回ごとのゼミを進めてきました。

まず、ゼミが始まる前に、あらかじめ班ごとに机を合わせて座るようにしてもらいます。そして、一回のレジュメや資料はけっこうたくさんあるので、配るのではなく、学生に取りにくるようにしてもらい、その時間を利用して出

欠をとる場合もあります。

次に、昨年度は、留学生のRさんに中国語の童謡を教えてもらって皆で歌ったあと、前回の各班の討論内容を紹介してもらいます。

そして、担当の班にテキストの今日の検討部分を作成したレジュメに基づいて発表してもらいます。その際、内容紹介だけでなく、あらかじめ班で話し合って、感想や疑問点、意見等もコメントとして必ずレポートするようになっています。だいたいどの班も、事前に班で感想や意見を出し合ってコメントを加えて発表してくれました。

レジュメは、けっこうな枚数になるので、前日までに私の研究室のドアのボックスに提出してもらうようにしています。そして私の方で大学の印刷機で印刷してもついでにしようにしています。ゼミ直前に学生に委ねてコピーをさせると、どうしても手間取ってゼミ開始の時間が遅れるし、こうすると学生の方もコピー代がうるので一石二鳥です。班からの内容紹介とコメントの報告のあと、三十分くらいを、まず班での討論の時間にあてます。このとき記録用紙を渡して、一応、司会（班長担当）と記録係（学習係担当）を決めて進めるようにアドバイスしますが、まずは日頃の「おしゃべり感覚」で自由にフリー・トークキングして

もらうわけです。私自身は、担当の班からの発表の後、コメントの内容にそって討論の柱をいくつか整理し、最初にクラス全体に話題提供したあとは、各班をわたり歩いて、さらに踏み込んで話題提供したり、「○○についてはどう思うか」とか、「こういう考え方もあるのではないか」と班での見解に反論を述べたりして、議論をふきかけたりします。学生たちも、私に質問してくるのでそれに答え、さらに問題をなげかけたりしていきます。時には、一つの班で話が盛り上がってずっと居続けたりしますが、できるだけすべての班をまわるようにこころがけています。

その後、時間があれば、討論の盛り上がった一、二の班にクラス全体に報告してもらいます。最後に、私の方で今日の発表と討論をふまえたまとめをし、班ごとの討論記録を必ず提出してもらいます。

この記録は、全班のものに私のコメントを簡単に書き加えて、次の時間までに印刷して、他のレジュメ等と同じように学生に配布します。それを授業の冒頭に各班から報告してもらいます。前回話し合ったことを思い出すことで頭をゼミの学習に切り替えるようにするとともに、クラスみんなで討議内容を共有するわけです。

こうして一年間進めていくと、レジュメや記録は相当の

量になり、ファイルに二冊分にもなりました。

このように、三十七人でなんとかゼミらしいゼミを行なうために、まずは六つの班にわけ、各班で日常の「軽いおしゃべり感覚」の延長上で、「マジな」話し合いにもっていくことをねらって進めてきたつもりです。そして自分たちの日常の「生活世界」での身近な関心事をきっかけとして、テーマにそって知識を増やし自分の考えを形成していく、そしてそれを他人の考えとつき合わせて検討するようにしていったのです。共有しやすい内容を楽しく共同で学びながら、自分の内面と向き合っていけるよう工夫してきたつもりです。いわゆる青年期における「自分づくり」をゼミ学習を通して促すことをめざしてきたわけです。



13	9/16	夏休み活動報告(各班、クラス全体) 課題図書レポート提出
14	9/30	夏休み課題図書の紹介・検討(まず各班で、次に各班から1名クラス全体での紹介)
15	10/7	{*Rさんの楽々中国語講座・前期の復習}後期テキスト『生命かがやく日のために』の「まえがき」の読みあわせ、レポート分担の決定
16	10/14	ビデオNHKスペシャル「大江健三郎の世界一響き合う父と子」 [*] ミニ感想文 大江健三郎ノーベル賞受賞の紹介('94. 10. 14. 朝日新聞)
17	10/21	前回ビデオの感想の紹介 テキスト講読 『生命かがやく日のために』(P P. 14-49, レポーター: 6班) レポーターへの質疑・応答、各班で討論、全体でのまとめ
18	10/28	{*Rさんの楽々中国語講座: 王老先生有一塊地}前回の意見・感想の紹介 テキスト講読 同上(P P. 50-94, レポーター: 3班) レポーターへの質疑・応答、各班で討論、全体でのまとめ
19	11/11	{*Rさんの楽々中国語講座: 王老先生有一塊地}前回の意見・感想の紹介 テキスト講読 同上(P P. 94-130, レポーター: 4班) レポーターへの質疑・応答、各班で討論、全体でのまとめ
20	11/18	映画『愛は静けさの中に』(AVホール)、ミニ感想文
21	11/25	前回の映画の意見・感想の紹介 テキスト講読 同上(P P. 134-197, レポーター: 5班) レポーターへの質疑・応答、各班で討論、全体でのまとめ
22	12/2	{*Rさんの楽々中国語講座: 両隻老虎}前回の意見・感想の紹介 テキスト講読 同上(P P. 198-237, レポーター: 1班) レポーターへの質疑・応答、各班で討論、全体でのまとめ
23	12/9	{*Rさんの楽々中国語講座: 両隻老虎}前回の意見・感想の紹介 テキスト講読 同上前回のやり残し(P P. 226-237レポーター: 1班)今日の報告 レポーターへの質疑・応答、各班で討論、全体でのまとめ
24	12/16 (最終回)	映画『レナードの朝』(AVホール) ゼミ終了レポートの提示

(表1)'94年度短大1年生Fクラス「教養演習」年間の学習内容一覧

回	月/日	ゼミの取り組みと学習内容
1	4/8	自己紹介・記念撮影、新入生歓迎オリエンテーション合宿の説明
※	4/13 14	新歓オリ合宿 [全体企画：共歓から共感へ（二本松はじめ氏）] [クラス交流会：夕食後、各クラスごとに] [全体講演：性と愛の入門（村瀬幸浩氏）]
2	4/15	オリ合宿の感想を語り合う、村瀬先生の講演を聞いて（感想とお礼の手紙を書く） ゼミ運営について（ゼミでの学び方と諸係の決定）
3	4/22	テキストの紹介と決定（前期・夏休み・後期の3冊）{*Rさんの楽々中国語・あいさつ} 連休の課題の提示（マンガ『どんぐりの家』山本おさむ著）読んでの感想
4	5/13	『どんぐりの家』を読んで（班で感想を報告）{*Rさんの楽々中国語・かず} 前期テキスト『はくらのSEX』のレポート分担の決定
5	5/20	テキスト講読『はくらのSEX』（P.P. 9-51, レポーター：亀谷） レポーターへの質疑・応答、各班で討論、全体でのまとめ
6	5/27	前回の各班での意見・感想の紹介。 テキスト講読 同上（P.P. 52-104, レポーター：3班） レポーターへの質疑・応答、各班で討論、全体でのまとめ
7	6/3	前回の各班での意見・感想の紹介。 テキスト講読 同上（P.P. 105-149, レポーター：2班） レポーターへの質疑・応答、各班で討論、全体でのまとめ
8	6/10	{*Rさんの楽々中国語講座・大像} 前回の各班での意見・感想の紹介。 テキスト講読 同上（P.P. 150-210, レポーター：1班） レポーターへの質疑・応答、各班で討論、全体でのまとめ ビデオ：NHK平成世の中研究所「子どもたちはどこまでセックスを知っているか」
9	6/17	{*Rさんの楽々中国語講座・春一番} 前回の各班での意見・感想の紹介。 テキスト講読 同上（P.P. 211-264, レポーター：5班） レポーターへの質疑・応答、各班で討論、全体でのまとめ ビデオ：NHK平成世の中研究所「子どもたちはどこまでセックスを知っているか」
10	6/24	{*Rさんの楽々中国語講座・星星} 前回の各班での意見・感想の紹介。 テキスト講読 同上（P.P. 265-313, レポーター：4班） レポーターへの質疑・応答、各班で討論、全体でのまとめ
11	7/1	{*Rさんの楽々中国語講座・兎子舞} 前回の各班での意見・感想の紹介。 テキスト講読 同上（P.P. 314-352, レポーター：6班） レポーターへの質疑・応答、各班で討論、全体でのまとめ
12	7/8	{*Rさんの楽々中国語講座・これまでの復習} 前回の各班での意見・感想の紹介。 テキスト講読 同上（P.P. 353-380, レポーター：6班） レポーターへの質疑・応答、各班で討論、全体でのまとめ 前期まとめのレポート、夏休み課題図書提示

学生の取り組み状況はどうであったか

——レポートの一部より——

さて、一年間終わってみると、学生たちは、前期・後期にレポーターとしてのレジュメ作成と報告発表が計二回、夏休みの課題図書レポート（四百字原稿用紙・五枚以上）と前期・後期のまとめのレポート（B4、一枚）を計三回、そしてマンガ『どんぐりの家』や映画『愛は静けさの中に』などのミニ・レポート（感想）を計三回こなしてくれました。

過密カリキュラムの多忙のなか、これだけの課題をこなしてくれたのは、最初に私がある程度の「誘導」したものの、やはり自分たちの関心ある学習テーマとテキストを自分たちで選択し取り上げたということが大きかったように思います。ほとんどの学生たちは、レポート発表の準備が大変だったと言ってくるにもかかわらず、二年生になってからも「先生のゼミは楽しく学べて、勉強になった」、「充実していてよかった」と声をかけてくれました。

ここでは紙面に限りがあるので、テキストの個々の内容にまで踏み込んで学生が何を学びとったかという点の詳細な検討は、別の機会にゆずらざるを得ませんが、学生たち

のレポートや自主的に取り組んだエピソードを紹介しつつ、前述した指導上の基本視点にそくして検討し、最後に短大での教養教育の課題についてもふれたいと思います。

話し合い考え合うことの

意義をつかみとる

——「対話」から

パブリックな討論へ——

んでくれたことです。そして、当初もっていた自分の意見を、友人の様々な意見を受けとめ取り入れながら、修正・発展させていくことの意義をつかみとってくれたことです。また、特にうれしかったことは、多くの学生が、ゼミの時間以外にも昼休みや帰りの電車の中などで、ゼミの内容について、親しい友人どうしで話題にし、考え続けてくれたことでした。

「ゼミで一年間学んで」という題目での最後のレポートで、多くの学生たちが、たとえば次のような感想をよせてくれました。

「自らの意見を述べ、議論をするというのは、とても難しく、戸惑ったりうまく話が進まなかったりということもありました。が大変勉強になりました。自分個人の狭い考えで結論に近づ

けようとするのはなく、多くの意見をとり入れながら自分の道の道を見いだしていくことが大切だということに気づきました。」

「私がまず一番にゼミで学んだと思うことは今まで読んできた本の内容よりも、班で一人一人が読んで本についての感想や疑問点、また本や班で見た意見への反論の大切さです。大学に入るまでは一人で本を読み、読み終えたら自分の考えを人に話すことも少なく、人の意見・感想を聞くことがなく、その本に對する考えは、自分一人だけのもので終わっていました。だから一つのことに対しては自分の考えしかなく、他にもいろいろな考え方があったことや、自分とは違う方面からの見方を知ることがありませんでした。しかし、班で話し合う度に、いろいろな考え方があり、自分と違うとらえ方をする人もたくさんいるんだと思いました。それと同時に、班の子の意見に反論すること、みんなに『でも、私は……だと思うよ。』と細かく説明して、自分の思っていることを知ってもらえることもできたと思います。一つの質問や事柄について話し合えるということが、楽しいなと思えるようになり、そのことを学ぶことができたと思います。」

「ゼミでは他の講義とは違ってみんなの思っていることや考えがわかり、話し合えるのでとても楽しみにしていました。価値観・人間観はそれぞれ違う。初め私はとても他人の考えを受け入れるどころか偏見もありましたが、後期に入る少し前ぐらいからは『すばらしい、こんな人がいるのだな』とか、自分では考えつくことのできないようなことの発言がとてものもしく楽しみになりました。今までの義務教育をふりかえると、このような人を見つめ、思う余裕などなかったように思います。それに気づき、今ゼミで積極的に話し合っているだけでも大学へ来てよかったです、終えた今、思いました。」

ただ、どの程度までパブリックな討論にもつていったかという点、まだまだ「私的な」対話の延長上のレベルで終わってしまった感じは否めません。何人かの学生は次のようにクラス全体でもっと討論できればよかったですと述べていました。

「私が、このゼミで一番良かったと思うことは、グループでレポートをまとめる時など、どんな問題についても班のメンバー全員が真剣に考え、意見を出しあい、成果を出せたことです。これがクラス全体でできたらどんなに良かったらうという気持ちも残りますが、これは来年のゼミの時に生かせたらいいと思います。」

私としては、後期からは、二つの班を「合体」して十二人の三つのグループをつくらせ、司会者のもとに話し合い

をするように促しました。私がチューター役をして、グループを周りながら、三つのゼミを組織し、パブリックな討論を促そうとしたわけです。そして、最後に時間をとってクラス全体討論にまでもつていこうと考えたのですが、これはあまりうまくいきませんでした。どうしても班のメンバーどうして話はずんで、十二人でまとまって討議するのは難しかったようです。

時には、班の話し合った内容の紹介から異なった意見がでた時、クラス全体でのディスカッションやデイベートに発展しそうなこともありましたが、私の力量不足で十分にはできませんでした。これについては、やはりデイベートの技術指導をまず行なう必要があったし、あらかじめテーマをしぼって学生たちに論点を提起していく必要もあったと思います。今後の課題です。

学習内容から
年間を通してのゼミのテーマは、学生の一人がいみじくも指摘してくれたように、**自己を対象化**
「人間らしさの追求」ということであつていく
たと思います。

私としては、前期は性の問題を通して、後期は、障害と生命（いのち）の問題を通して、「みんながまだ知らないことで、これから生きていく上で知っておくべきこと、考

えておかなければいけないことは、いっぱいあるんだよ」という思いで、いろいろと参考文献や関連する新聞記事をほとんど毎週、資料として提供してきました。「今すぐ結論を出さなくてもいいから、これからも自分自身で考えていってほしい」と、それらの資料からも話題提供をしていきました。個性ある学生たち一人ひとりの認識の深化（発展）をすべてつかみとることはできませんが、レポートから、ある程度手応えは感じとることはできました。

前期に取り上げた『ぼくらのSEX』は、最初は、授業でこのような内容でやっていくことに戸惑いつつも、性の問題について、いろいろと自分でしっかり考えておく必要があることを学びとってくれたようです。この著書は、どちらかというとな性の若者向けに書かれてあり、学生たちは、筆者の男性の立場からの見解に意義を唱えることも多々ありました。しかし、全体を通して、以下のような感想を書いた学生が多かったです。

「前期の始めのころからSEXの問題でとばしまくって…。大学ってマジでこんなんでええのん？ っと思いました。友だちと性の話を真剣にする私たちを、ゼミ以外の友だちは信じられないといった様子でみていました。でもきつと彼女たちも話の中に入りたかったことでしょう。」

「ゼミでこのようにSEXについて学ばなかったら、このま
ま大人になって、知らないうちに…ってことになっていったか
もしれない。かたくるしい勉強を少しはなれて、人生学(?)
みたいでFクラスならでは、って感じで、とっても楽しかった。
大きな勉強をしたって感じです。」

「毎週金曜日の二限めはいつも楽しみだった。理由はいろい
ろあるけれど、…自分の興味のあることが勉強できる、唯一亀
ちゃんの話が身近で聞けること、など。…いろんな意味で教養
演習の時間は私を成長させてくれた。」

「SEXに関して話し合うことは別に変なことでも、いやら
しいことでもないと思っただけのもの、どこかで変に意識し
ていた。しかし、教養演習でこの本を読んでみて、みんなで話
し合っているうちに、変な意識はほとんどなくなったように思
う。そしてSEXに関して正しい知識をもち、このように話し
合うことは非常に大切なことだと思った。誤った知識を持った
人があまりにも多すぎると思う。性教育に関して、まだまだオ
ープンでない日本を正しい意味でもっとオープンにしていくべ
きだと思う。」

また、後期のテキストは、簡単に結論がだせるような問
題ではないので、議論がややもすれば堂々めぐりになること
もありましたが、生命の重みと「共生」の内実について、

考えるきっかけにはなったかと思えます。また『どんぐり
の家』や、アグネス・チャンの『幸せなのになぜ涙がでる
の』などとあわせて、「豊かな」日本のなかにまだなご根
強く存在する差別の問題等に考えをめぐらせてくれた学生
も多くいました。

「前期は性について、後期は生命の尊さについて、と一年間
を通して学んできましたが、大学には学びに来ているんだから
当たり前のことなだけども、私たちの知らないことや、考
えなくてはいけないことがまだまだたくさんあるんだと、思い知
らされました。まだまだ障害をもっている人たちが生活してい
くには、きびしい世界、だから胎内にいる子どもが障害を持っ
ていると分かった時点で墮胎する人や、生まれてから知能など
に障害があることが分かり見捨ててしまう人がでてくる、そん
な世界はすごく悲しいなと思いました。私も初めは『生命輝く
日のために』を読んだとき、親にひどいな、と思いました。子
どもは一生懸命生きようとしているのに、それを見捨ててしま
うなんて。でもよくよく考えてみると、そういう考えを親に持
たせてしまうような社会を周りの人たちがつくってしまったて
いるんだ、だからこういう親をせめるのではなく、こういう考え
を持たせるような社会にしまっている自分たちが変わって
いかななくてはいけないんだ、と思いなおしました。」



自分たちを「ダメ」という言葉でけなし、自分たちの人権を奪うのはやめて下さい。特にハンディキャップを持つ子には……。と訴えているのを読んで、健康者でも追いつめられ傷ついている人もいるのに、障害者にとって住みよい社会を作るなんてとても素晴らしいことだなあって思ったよ。



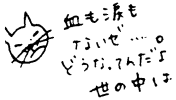
そうだよね。行政の援助の不足について P.161 に書いてあるけど、症状が出るまでお金の援助がないから、障害があるとわかっていても、その障害が悪くなってからでないと十分な治療もできないので、早期治療ができません。症状が悪くなって手おくれになってしまつて書いてあるけど、本当にそういうのを行政の援助というのかなー？



そういえば、P.148 に障害者がいるということは 国にとっても大きな損失と書いていた 40歳の人もいたねー。



あの手紙はけっこうおかついたよ。障害者のことをそんなのはあさり切りすてて為になる者のために医療費を使てきわいた。って書いてあったから。「そんなの。」って言う言い方はないと思う。健康者は、障害者の為に苦勞しているし、寿命の短い者に無馬太遣いはもったいないと思う。という意見は絶対、糸内得できない。人を救うことは、無馬太遣いなことではないし、お金を無馬太遣いに使は過ぎているこの世の中なのに、障害者に使うお金は無馬太遣いだなんて……。この人は血も涙もないんじやないのー。



血も涙も無いや……。どうなのだよ。世の中は。

権利について



そうそう。権利ていへば、P.163のどんな子どもでも生かせる権利があるというなら、死ぬ権利はないのでしょうか？ という男の人の意見はわかる気がするけど、死ぬのは権利なのかなー？

死ぬとか殺すとかいうことで権利じゃないよね。前に、親には子どもを殺す権利がある。てあったけど、人間には同じように生きる権利があるんだから、親だからといって子どもを殺す権利なんてないと思う。



P.157の障害を持った女の子が「障害をもった子どもが十分に生きていけるような合意とか倫理などうまれるはずもない。」と書いているけど、そういう合意や倫理をうみだすことのできる社会を作っていく必要があるよね



でもこの人は自分が障害を持っていて世間の人に笑いの種にされたり、好奇の目で見られたりしているから、障害者は死ぬべきだし、死ぬことを許されてもいいと思う。という意見を書いているから、障害を持つ人にしかわからないつらい思いがあるんだろうね

結局、障害を持っている人が、そういう気持ちになる社会を、我々が作っているわけだから、知らない間に我々は、障害を持っている人を追いつめているのかもしれないね。



P.167の14歳の女の子は障害を持っていないけれど、先生に「お前はダメだ」と言われ傷つき、この世の中にダメな人間なんて存在しないと思っていたけれど、そう断言する自信がなくなった。と書いてあるよね。

「後期の障害についての問題も、ゼミをきつかけにもっとみんなが考え、取り組まなければならぬ問題なんだと思うようになりました。私自身も『どんぐりの家』や『生命輝く日のために』から、家族や、周りの人たちの思いや考え、偏見や差別の現状、生活していくには充分でない環境などまだまだ沢山の問題があることを知りました。障害があってもなくても、同じ人間として、生命の尊さは変わらないということをもみんなが理解し、もっと良い環境づくりをしていかなければならないと思います。そして健常者と障害者が接する機会をもっと増やし、一緒に生活できるようになるといいと思います。」

「女性としての生き方、幸せとは何か？を考えさせられたのが、夏休み中の課題の『幸せなのになぜ涙がでるの』でした。働く母親として先輩の筆者の意見や体験などを通して、保育の重要性を改めて感じました。その反面、現在の保育制度は必ずしも働く母親にとつて、満足できるものではありません。来年のゼミでは、この本を読んで私が感じたこと、疑問に思ったことを深く追求していきたいと思っています。教養ゼミでは性について、働く女性と保育、障害をもつ人々と周りの人の生き方など、様々な分野を学ぶことができ、本当に良かったと思います。一年間ありがとうございました。」

学ぶ力・

エネルギーを

発揮する

学生たちは、忙しいなかでどの班も基本的にはサブ・ゼミを行なって、テキストの内容紹介だけでなく、自分たちの感想・意見も報告してくれました。このことだけでも、私にとつてはうれしいことでしたが、二年間のゼミをとおして最もうれしかったことは、単なる本の内容紹介とそれへのコメントの発表だけでなく、私が何も指示しないのに、学生たちが自主的に考え工夫して、ゼミの発表を行なってくれたことです。

これは、一昨年後期のことですが、ある班は、障害児をもつ母親と本学の障害学生数人にアンケートをとつて、その結果とそれに対する自分たちの考えを報告・発表してくれました。障害者の実際の生の声を紹介してくれたこの発表には、私自身もたいへん勉強になりました。

また、昨年の後期にも、三日間友人の下宿に泊まり込んで討論し、その内容を詳細にまとめて、自分たちの見解を報告・発表してくれた班もありました。その班は、けっこうゼミ中におしゃべりをしまくる仲の良い元気な子たちが集まっていたのですが、自分たちの担当のときには、本領を発揮し、自分たちが納得できるまで徹底して取り組んでくれました。レジュメは、B4で八枚の量にもおよぶもの

で内容紹介は省いたものでしたが、自分たちの討論をできるだけ忠実に再現するかたちでまとめてありました。さすがにこの時の報告は、クラス全員「しーん」と一心に聞き入っていました。(資料2)

その班の学生の一人は次のように振り返っています。

「最もよかったのは、後期の『生命かがやく日のために』のレポートのやり方を工夫したことです。他の班は本の要約が中心でしたが、私たちの班は自分たちの討論をまとめて報告しようということにしました。しかし、実際やり始めたら、なかなかうまく進まず、途中で挫折しそうになりました。でも、ここでやめてしまったらダメだと言いきかせ、三日間班のメンバーのYさんの下宿に泊まり込んで討論をし、さらに授業の休憩時間も使った話し合いでなんとか仕上げることができました。本当に大変だったけれど、できあがった時と、プリントとしてみんなに配られた時、やったんだ! と満足感を与えることができ、本当にやってよかったと思えました。きっと一生の思い出になると思います。」

女子青年の発達と教養教育の課題

——まとめにかえて——

この二年間における私の「教養演習」の取り組みは、三

十七人というクラスで様々な制約のなか、私があらかじめレジュメはすべて印刷しておくなどある程度効率性も追求しつつ、ゼミらしいゼミを行なうにはどうしたらよいか、というところから出発したように思います。

最初にも述べたように、短大保育科は、多くの必修資格科目があり、二年間に三回の実習をこなしていかなければなりません。職業選択について当面さし迫って考えなくてもよい、モラトリアムを享受し得る四大の学生とは違って、保育科の短大生はこれまでの学校教育の延長といった感じで学生生活を送っていきます。そして「入学してすぐ就職」といったあわただしい二年間です。⁶⁾このように職業教育の比重が高く、ともすれば保育の実践的な内容にだけ関心の向かいがちな学生たちに、どうしたら少しでも自身で自己を見つめ直し、社会の問題に視野を拡げてもらえるか、という課題意識で取り組んできました。

ゼミをとおして、彼女たちの人生の当面の「発達課題」の内実をいかに受けとめるか、またそこにフィットする内容でテーマやテキストを設定し、日常の「対話」の延長上で議論をどう組織していくか、このことが課題の「共有化」のためにも、決定的に重要であることがつかめました。

学生たちは、私の期待した以上に学んでくれたように思

います。それは四大福祉学部と併設の、目的意識の高い学生が全国から集まる本学短大ゆえに可能であったからかも知れません。いづれにせよ、そもそも学生たちの学ぶ意欲・要求に支えられてのことで、学生たちに励まされて、このようにやってこれたのだと思います。

たいへん残念なことに本学短大保育科は、大学全体の経営戦略のもとに今年度で三十五年の幕を閉じます。しかし、今後もこの二年間の教養演習での実践の成果をふまえて、大衆的青年期における多様な「教養教育」のあり方について、理論的にも実践的にもさらに深めていきたいと思えます。

(注)

(1) 「女子青年の発達と『実習教育』—短大一年生における『実習教育』の試み—」亀谷和史・秋野勝紀・斎藤文夫(『日本福祉大学・課題研究報告』一九九二年所収。五十七頁〜八十七頁)

「女子青年の発達と『実習教育』の課題—今後の四年制保育者養成大学における『実習教育』の課題—」亀谷和史・秋野勝紀・斎藤文夫(日本教育学会第五十二回大会(立教大学)、自由研究Ⅱ⑭・教師教育Ⅱで発表。一九

九三年八月二十六日)

「(女子)青年の発達と今後の『実習教育』の課題」

亀谷和史・秋野勝紀・斎藤文夫(日本保育学会第四十七回大会(昭和女子大学)ポスター・セッションP五六で発表。一九九四年五月十四日)

(2) 本学短大は、サークル活動も四大・短大の区別なくいっしょに行なわれています。その影響もあつてか、近年の学生においては、彼女たちの取り組みにすべて委ねるといった以前のやり方では、一昔前の学生では可能であった主体的集団的な取り組みに発展させていくことができなくなっていました。そして、いわゆる夜のコンパ等を介して、低次の「学生文化」(バカ騒ぎ、一気飲み等)が、正規の集団づくり活動と混在してパブリックな活動レベルにまで浸透し、大学での学習生活への動機づけにはなり得なかつたのです。

このことは、「学生文化」のもつ青年期としての発達の論的な意味を否定することではありません。これについては、別に検討を要しますが、ここで言いたいことは、小集団でならともかく、大衆化したマスプロ私立大学の新入生に対して、いわゆる「集団(クラス)づくり活動」から始めることは、個々人のレベルでの友人関係を

築かせることになるものの、もはや「遊び」的な活動水準にとどまってしまう、教育的な意味をあまり持ち得ないということです。そうではなく、青年期にふさわしい水準の高い文化内容¹¹「教養」（例えば、性の問題や女性として生き方、福祉問題等）を彼女たちに提示し、共有化すること、つまり学問への問題関心において認識の共有をはかること、そしてそのことで大学での学習の動機づけを促すこと——、ここにこそ、大学教育への導入としての新歓合宿の意味がある、と当時、私たちは考えたのでした。

(3) 「習慣的行動」は、P・ブルリユの用語です。

私の教養ゼミは、これまでの学校教育のなかで、ヒドウン・カリキュラムによつて形成されてきた学生たちの「習慣的行動」をいかに崩していくか、また教師・生徒関係を相対化し、いかに相互応答的關係をつくっていくか、という問題意識を持つて行なつてもきました。これらに関しては、今後別途に検討し、総括したいと思つています。

(4) 一例として、女性問題に関しては『安穩族』石坂啓著（集英社）、障害児問題としては『どんぐりの家』・『遙かなる甲子園』山本おさむ著（小学館）、また出産

・子育てに関しては『わたし天使・あなた悪魔』田嶋みるく著（婦人生活社）・『不妊・出産・育児物語』天野夏美著（主婦の友社）、戦争と平和に関しては『アドルフに告ぐ』手塚治著（小学館）といったようにです。

(5) 雑誌『教育』一九九四年二月号、五十二頁

(6) この点に関しては、「座談会 短大の教育実践を展望する」伊藤祐子・亀谷和史・神田英雄（『大学と教育』第十一号、一九九四年七月、二十五頁〜二十六頁の神田発言を参照。

